

## 志と言靈 奥田亡羊

ここ一二三年、客観的にものごとを考えることにある生理的な抵抗感を感じるようになつた。その原因が福島原発事故にあることは自分でも何となく気付いている。個人的な話だが、当時、事故を知った私はすぐに家族を避難させようとした。しかし経済的な事情で私たち家族は逃げることができなかつた。放射能汚染による子どもの健康被害への不安を抱えながら、結局、今も同じところに住んでいる。大袈裟に言うつもりはないが、これは第二次世界大戦中にユダヤ人に起つた出来事と似ている。ナチスによるユダヤ人迫害の噂を聞きながらなぜユダヤ人たちは逃げなかつたのか。非日常が訪れるまで昨日と同じ日常を続けるより他になかつたのである。さらに言えば、被災者の苦悩とかホロコーストの悲劇といったものも存在しない。苦悩はすべて身体的な痛みや肉親の死、経済的な困窮といったきわめて具体的で個人的な苦しみや悲しみでしかない。もしそれを震災の被災者の苦悩とか、ホロコーストの悲劇とか分類したとしたら、日常を生き続けねばならない一人一人の苦悩はたちまち無意味化する。そうした懷疑が深く私の心に根を下ろしているようだ。

本題に入らねばならない。今、歌壇は「主題」という言葉を軸に動いている。角川の短歌年鑑で佐佐木幸綱は二年連続で歌の主題について語っている。「題詠」と近代以降の日記のように日常

をうたう「自我の詩」としての歌を対比し、主題が歴史や伝統とつながる接点であることを論じたものだ。去年の短歌年鑑では篠弘が昨今の「各賞の受賞作は、震災詠の評価がその決め手になっている」と、米川千嘉子『あやはべる』、大口玲子『トリサンナイタ』、吉川宏志『麦燕』などを例にあげて論じている。これも主題にスポットを当てた歌壇時評である。

同じく去年の短歌年鑑に掲載されたものだが、川野里子の「世界への断念、突出するトリビア」も現在の歌壇を鮮やかな切り口で捉えた評論として記憶に新しい。川野は米川や大口らの作品が主題を明確にする問題提起型であるのに對し、昨今の若手歌人の歌が「先鋭に受け身」であるという。とくに永井祐の作品には「世界へのあらかじめの断念と反比例するように拡大されるトリビアへの強い関心」があると指摘し、永井ら若手歌人の作品に世界への積極的な問い合わせが少ないのはなぜかと問いつつ、「歪んだ世界を抱え込むように内向する言葉に深く潜伏する問い合わせ、このような世界で自ら自身をトリビアルな断片と化しながら生きるほかない若手の今についてもつと語られるべきだ」と結んでいる。

若手歌人の作品がトリビアルな方向へと向かい、歪んだ世界を抱え込むように内向するのは、森を描くのに森の内側から描く行為に等しい。森を外側から客観的に描いたときに無意味化する自己の苦悩を通して、逆に世界の方を塗り変えて見せているのだ。ただそれは今的一点にポイントを置いた表現の転換である。歴史をどのように継承することができるか、それが短歌の主題の問題に他ならないのだが、さらにその先にあるのは過去と未来を結ぶ「志」の問題と、未来への希望を回復できるかという「言靈」の問題であるようだ。